

## ● 関 西

よこはら せん し  
横 原 千 史

新型コロナウイルスCovid-19のせいで音楽界も未曾有の大混乱となった。このコロナ禍以前と以後に分けて関西の音楽活動を概観したい。コロナ禍以前のオペラでまず挙げるべきは、堺シティオペラの《アイダ》。並河寿美、水野智絵、福原寿美枝らの熱唱と大合唱の舞台をまとめた牧村邦彦の指揮が光った。びわ湖ホールがワーグナー《ニーベルングの指環》4部作の《神々の黄昏》を上演した。コロナ禍で無観客・ライブストリーミング配信となり、海外を含めて延べ41万人がネット上で視聴した。音楽監督沼尻竜典の指揮、フランツ、ミューター、池田香織、妻屋秀和らの歌唱、ハンペとギールケの美しい舞台など、4部作完結篇に相応しい出色の出来であった。無観客は惜しい。観客を入れての再演が望まれる。この成果と新しい試みに対して、菊池寛賞が贈られた。

関西二期会は新設された東大阪市文化創造館で《カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》の公演を行った。

3月上旬から6月下旬まで、演奏会はほとんどなかった。その中で大阪フィルハーモニー交響楽団は、井上道義指揮でいち早く無観客ライブ配信の演奏会を行った。観客を入れての最初は大植英次指揮の定期演奏会で、フェスティバルホールの入場者数を1/3~1/4に減らし、プログラムを小規模編成のベートーヴェンに変えた。コロナ禍のせいで外国人指揮者の来日が困難になり、代役として普段は定期演奏会の指揮台に立たない飯守泰次郎がブルックナー交響曲第6番で、小林研一郎がチャイコフスキーのマンフレッド交響曲で名演を聴かせた。音楽監督尾高忠明は定期演奏会でマーラーの交響曲第5番を振ったほか、今年はチャイコフスキーの交響曲全曲を3回に分けてチクルスとした。

今年はベートーヴェン生誕250年で、関連する様々な演奏会や企画が中止となってしまった。その中で最大のイベントは、日本センチュリー交響楽団のオペラ《フィデリオ》(セミ・ステージ形式)。首席指揮者飯森範親の指揮の下、歌唱陣、オーケ、合唱とも素晴らしく、とりわけ第2幕後半は圧倒的で、記念年に相応しい公演となった。きっとコロナ禍に苦しむ人々の希望の光ともなっただろう。飯森による「ハイドン・マラソン」もザ・シンフォニーホールに会場を移して、着々と進められた。ミュージック・アドバイザーに就任した秋山和慶は、メンデルスゾーン《スコットランド》などを指揮した。

大阪交響楽団は記念年に合わせてベートーヴェンの作品を必ず入れるプログラミングをして、名誉指揮者に就任した外山雄三が交響曲第4番と第8番を定期演奏会で指揮した。また楽団創立40周年を記念して、過去の音楽監督大山平一郎、曾我大介、小泉ひろし、トーマス・ザンデルリンクが定期演奏会で指揮台に立った。そのうち曾我のベートーヴェン三重協奏曲は若手ソリストとの共演で爽やかな印象が残った。またコロナ禍で来日が困難になった外国人指揮者の代役を正指揮者太田弦が務めた。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、創立50周年を迎え、コロナ禍で音楽監督のデュメイは来日できず、様々な企画が流れて

しまった。その中で首席指揮者藤岡幸夫が中心となっていち早くクラウドファンディングを行って話題となる。8月から11月まで約900人が参加し、約2200万円集まった。藤岡幸夫は震災以来閉館となっていた吹田市メシアター大ホールのリニューアルオープン記念演奏会でベートーヴェン交響曲第7番などを指揮した。また藤岡はテレビ番組「エンター・ザ・ミュージック」で関西フィルの演奏を盛んに紹介している。桂冠名誉指揮者飯守泰次郎は、久々に年末のベートーヴェン《第九》のタクトを執った。

京都市交響楽団は、コロナ禍で楽団全体の演奏会を開けなかった7月には、楽員の室内楽によるアウトリーチ公演を各地で開いた。演奏会が開けるようになってからは、首席指揮者広上淳一がヤナーチェク《シンフォニエッタ》などを振った。首席指揮者高関健は京都の秋音楽祭開幕公演でジョンゲン《協奏交響曲》などを指揮した。

兵庫芸術文化センター管弦楽団は、コロナ禍以降各楽団が大編成を避け、モーツァルト、ベートーヴェンなど小編成でできる演目に変更されることが多かったが、音楽監督佐渡裕の発案で、早くも9月に敢えて大編成の演奏に挑戦した。リヒャルト・シュトラウス《アルプス交響曲》で、オペラ仕様で舞台を拡大し、間隔をあけた120名のオーケストラと客席中央に10名のバンドを配し、「コロナに負けない」心意気を示した。その後定期演奏会は行わず、休憩なしの短めの特別演奏会を開いた。

いずみシンフォニエッタ大阪は、西村朗と中村滋延の新作初演のほか、郷古廉、藤原道山らソリストを迎えて意欲的なプログラムを披露した。テレマン室内オーケストラは、コロナ前に「ベートーヴェンと師匠たち」で室内楽を取り上げ、コロナ後もベートーヴェンの交響曲を積極的に演奏した。神戸市室内管弦楽団は、「ベートーヴェンの森」と題するチクルスで、日程や指揮者の変更を余儀なくされたが、交響曲第2番、第6番《田園》などを演奏した。オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラは、コロナ後の定期演奏会で、芸術顧問秋山和慶の指揮のもとジェイガーとリードの交響曲などで快演を聴かせた。大阪コレギウム・ムジクム(大阪ハイリッヒ・シュッツ室内合唱団)は、感染予防の歌えるマスク「OCMマスク」を開発し、当間修一指揮でシュッツ《マイイ受難曲》などを演奏した。

オペラはほとんどの企画が中止となったが、ほぼ唯一の公演となったのがみつなかオペラの景山信夫《満仲一美女丸の廻心》。20年前の市民オペラの再演であり、創作オペラの楽しみと醍醐味を味わわせてくれた。この成果により、文化庁芸術祭優秀賞が贈られた。

室内楽やリサイタルも軒並み減少傾向であった。その中で印象に残ったものをあげると、まず庄司紗矢香とオラフソンのリサイタル。庄司はコロナの帰国後の待機期間に体調を崩したようだが、それを感じさせぬ集中ぶり、バルトークのソナタ他を弾ききった。この名演を聴いて、コロナ前にサロネン=フィルハーモニアと共演したショスタコーヴィチの協奏曲の快演が思い出された。ピアノでは有馬みどりのベートーヴェン《ディアベリ変奏曲》、三木康子の尾高惇忠《ソナタ》、青井彰のショパン《前奏曲》が心に響いた。ベートーヴェン関連では関西ベートーヴェン協会が弦楽三重奏曲Op9全曲(里屋幸、中島悦子、大谷雄一)、チェロソナタOp102(崎元蘭奈、多川響子)など意欲的なプログラムと秀演で記念年に貢献をした。